



TITLE:

# 田丸節郎博士譯ハバー博士講演集 「國家と學術の研究」に就て

AUTHOR(S):

堀場, 信吉

---

CITATION:

堀場, 信吉. 田丸節郎博士譯ハバー博士講演集「國家と學術の研究」に就て. 物理化學の進歩 1931, 5(2-3): 13-15

ISSUE DATE:

1931

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/45920>

RIGHT:

(堀場信吉) 田丸節郎博士譯ハバー博士講演集「國家と學術の研究」に就て (13)

## 田丸節郎博士譯ハバー博士講演集 「國家と學術の研究」に就て

堀 場 信 吉

ハバー博士は現代世界の學界が生んだ最も偉大なる人物の一人である。博士の純正化學上に於ける優秀なる業績は今更に述べる迄も無い。その學術の應用に於ける技能に於ては世人周知の空中窒素固定ハバー法の事業だけでも決して他人の追蹤を許さない處のものである。然かも博士は單なる學者又は工學者では無い。その國家に對する經綸策は彼が堂々たる論議に於て窺はれ、其の論說の發表と共に着々と彼が意見を實行して行く處に彼が人物の偉大さが解る。歐洲大戰に當つて如何に博士が化學者として活躍したか。又戦後の疲弊せる國家を再び立たしめる爲めに如何にして戦後に於けるかの燦然たる獨乙學術の精華を發揮せしめ得たか。今や吾が國未曾有の國難來の時機に於てハバー博士の學術振興策は化學者は勿論廣く一般の人士に對して大きな參考になると考へる。この時に當つて田丸博士の麗筆になるハバー博士の名講演の譯を得た事は實に喜に堪へない。

筆者は本誌の讀者に特に本書の一讀を薦める爲めここにその内容の一端を紹介したく思ふ。本書はハバー博士著 Fünf Vorträge, aus den Jahren 1920—1923; Verlag von Julius Springer, Berlin, 1924. 及び Aus Leben und Beruf, Aufsätze. Reden, Vorträge; Verlag von Julius Springer, Berlin, 1927. の兩書の中重要な講演七編を選び譯出したものである。ハバー博士の講演は稀に見る名文を以つて認められてある。今一度この一卷を翻せば同博士の面影が髣髴として浮び出であたかも親しくその唇舌に接する心地がする。博士は先づ戦前に於ける獨乙の化學發達の二大原因を述べてある。獨乙に於ては化學の天才が必しも他國

## (14) (堀場信吉) 田丸節郎博士譯ハバー博士講演集「國家と學術の研究」に就て

に比して多數にあつたわけでは無い。たゞ大家がその弟子の養成に留意して獨乙は常に有爲の化學者の大群を持ち得た事が第一の原因でありとしてゐる。第二の原因は獨乙國民の大勃興であるとし幾十年來兵役の義務を負ひ一つの大組織の一員として服従に慣れ且つ瘠土に於て困苦に耐へる様に鍛鍊されたる國が祖國統一の日が明け放たれ輝かしく太陽が差し昇つた時に於て精神生活にも經濟生活にも凡ゆる方面に世界的成效を贏ち得たものは自然の勢であると云つてゐる。もし博士の擧げた二大原因が果して眞なりとせばこれを我が國の現状に移して見れば如何して近い將來東洋の一角より世界學術の精華輝かしく咲き出る事があり得べからざる事と云へやふ。我が日本民族の現代に於ける勃興は世界歴史上の驚異である。たゞ組織的訓練に就てはやゝ缺くる處あるとしても此は今後訓練の方法の如何にある。我が國民個人として學才は決して歐米の人に比して劣ると考へられない。たゞ要は今後吾が國に於てハバー博士所謂學者の大群を如何にして養成するかにあると思ふ。又博士は如何にして歐洲の大戦中獨乙の化學者がこれに當つたかに就て詳細に亘つて述べてゐる。又敗戦の原因に關して化學の力の及ばなかつた處を述べて遺憾が無い。これ等ハバー博士の論旨はもし萬一吾が國民が正義の爲め世界を相手に立たねばならぬ時があつたとすれば如何にせば獨乙敗戦の轍を履む事なくして最後の勝利に達せしめ得るかを暗示するものである。

次に戦後疲弊せる國家を再び立たしめるには學術研究の振興にありと云ふ彼の意見は獨乙學術相扶會の設立となつて現はれ其の組織事務の施行の方針の詳細に關して述べてゐる。其の結果は戦後の極て困難なる時期に當つて戦前にも増して華やかな獨乙學術の業績を擧げ得せしめた事によつて知る事が出来る。假令世界經濟界の危機は獨乙の學術のみを以つて現在の獨乙國家を救ふ事が出来ない時期に立ち至つてゐるとは云へ一度世界の經濟界が常道に復歸した時には其の生み出した學術の効果は熾然たる光を放つに疑が無い。吾が國にこの獨乙の學術振興策を取り入れる事は獨乙の現状を見て必しも有効で無い云ふ人あらば其は實に近視

(堀場信吉) 田丸節郎博士譯ハバー博士講演集「國家と學術の研究」に就て (15)

眼的の見解であつて眞實に國家の將來を思ふ人の言葉では無いと思ふ。

ハバー博士は戦後短時日本を視察した。其の印象をも述べてゐるが實に吾人の教へらる處が多い。又獨乙と日本との提携に就ても一家言を建て實際博士の主張によつて伯林に日本學院東京に獨乙學院を開いてその實行に移らんとしてゐる

之を要するに本講演集に表はれたるハバー博士の意見は恰も吾が國の現状に照らして切實に考慮すべき問題を説いたものの如くであるから筆者は國を患ふるの士の是非一讀を薦めたいと思ふ。又前にも述べた如くハバー博士の文は實に名文であり田丸博士はこれを譯するに一言一句を忽にせず然かも流暢なる日本語に移されたのであるから學生諸子の獨乙語の研究によき材料ともなるであらう。

卷末に載せられたる田丸博士の日本に於ける學術研究の振興論説も亦必讀の文字である。田丸博士が櫻井先生を助け吾が國の學術振興策に努力して居られる事は人の知る處である。今や此の國策は吾が議會の協賛も得、廣く一般人士の贊助の許に着々實行の途にある由なれば其の効績の現はる日も遠くはないと思ふ。

學窓に塾居して自分の興味の上からはた又名譽心の爲めに研究に餘念のない學者は吾が國に得がたくは無い。然し己が尊い研究の時間を割いて多くの人々の研究の便宜の爲め従つて國家の學術研究の振興の爲めに努力すると云ふ人士は得がたい。田丸博士の在來の努力に對して厚い敬意を表すると共に今このハバー博士の講演集の譯出の如き勞作に對して再び感謝の意を表したいと思ふ。